郷里の話題

―宮澤賢治と普代村―

ふるさと普代会の初代会長を務められた熊谷文弥さん（七三・医師）＝鳥居出身東京在住＝から、「広報ふだい」に投稿をいただきましたので紹介します。（原文のまま）

宮澤賢治も紺碧の空からネダリ浜を見下ろしたであろうか（黒崎展望台）

「東京ふるさと普代会」の人たちは月一回郷里から送られる「広報ふだい」を楽しみにしている。私の折々の投稿も有益だと言う。

「平成十四年二月初旬普代村のふれあい交流センター管理員金子功氏から電話があった。

「先日宮澤賢治についてのある研究者の著書を読む機会があり、それによると賢治は普代村を通過し南下したようです。資料の中に〝浜善丸〟などの名が出てくるので後で送りますから検討してください」

右のような内容であった。

宮澤賢治という高名な詩人がその昔普代を通過したものなら、そのことを知らない村出身者が多かろうと思い、ふれあい交流センター管理員から送られた資料をもとに皆さまにお知らせしようと思い立った。

一　送られた資料

木村東吉

宮澤賢治〈春と修羅〉第二集研究

―その動態と解明―

第十六章〈三陸旅行詩群〉考

―詩群の有機的構成とその変容―

第三部　動態詩集〈春と修羅第二集〉翻刻本文稿

以上であったが難しい資料名である。金子功氏によると資料の執筆者木村東吉という人は島根と和歌山大学の教授とのことであった。

こういう難しい資料は「賢治研究者」とか自他ともに認めた「郷土史家」のやることで素人の私などがやることではない。しかしせっかく大量のコピーをされ、送られたのであるからこの中から普代村と関係のありそうな箇所を探し出して、賢治が郷里のどの辺りを通ったものかを想像し、私の表題の通り「郷里の話題」を「東京ふるさと普代会」の皆さまに提供したい。

それにしても木村先生は、賢治が三陸海岸の旅に出たと思われる大正十四年一月の汽車の時刻表や、徒歩旅行者のための日の出日の入り、宮古測候所の天候データ、このときの月齢、さらには当時の発動機船の速度まで調査、誠に詳細きわまる研究をされているのに感服した。

木村東吉先生は賢治の詩「発動機船　一」の中の「石灰岩の岩礁」は普代村太田名部港の近くで、土地の人がネダリ浜の「白壁」と呼んでいる白い岩であると、実地検分の上から結論され「白い岩礁の見える港はこの付近では他にない」と言っておられる。

ネダリ浜は部落から言うと太田名部よりは黒崎に近いが「白壁」と呼ばれる白い岩礁は現在磯釣り公園となっているネダリ浜の北側断崖から狭い幅の海を隔てた島である。賢治の詩によれば物を運ぶために石灰岩の岩礁と発動機船との間に二枚の渡り板が渡されていることになっている。島から渡り板を渡って船の看板に移る前に先ずネダリ浜の陸地側から島に渡らなければならない。難儀なことである。

しかし賢治は旅行記を書いているのではなく「詩」である。二つ位の情景を一つにまとめることもあるだろうし誇張創作もあろう。詩の場所がどこか特定することはなかなか難しい。

あるいは「ネダリ浜」ではないかも知れない。

二　浜善丸について

さて、金子氏からの電話の「浜善丸」とは、普代村堀内の屋号〈浜坂〉熊谷家は初代より五代まで代々〈善六〉を襲名、持ち舟を屋号と名前から浜善丸と名付け第六